

Road to リオ 導 守

4

日本代表では及川晋平監督(44)が戦術、戦略面を練り上げるのに対し、選手たちの精神面を鍛え、生活全般について目を光らせる。2月中旬に横浜市内で行われた強化合宿でも、ユニホームを雑に脱ぎ捨てたり、あいさつがなかったりという選手を厳しく指導した。

「(健常者も障害者も)スポーツ選手は日頃の考え方が、過ごし方すべてがプレーに出る。そこは一緒。人として当たり前のことをすることが、絶対、プレーにつながると思って指導している」
昨年から代表に関わり、10月の予選でリオデジャネイ

内面育てる兄貴分

ロ・パラリンピック出場権を得た。選手として過去4大会連続出場した京谷の指導者としての強みは、より選手に近い視線を持ち、現場を知っていることにある。そして今、頭に浮かぶのは、サッカー元日本代表監督の岡田武史さん「そうだと思う」

車いすバスケット男子 アシスタントコーチ 京谷和幸 44



チームの引き締め役を担う京谷和幸コーチ(左から2人目)＝三浦邦彦撮影

きょうや・かずゆき 1971年、北海道生まれ。室蘭大谷高を経てJリーグの市原とプロ契約。94年から本格的に車いすバスケットを始め、パラリンピックは2000年シドニー大会から4大会連続出場。08年北京大会で日本選手団主将を務めた。

かつて、Jリーガーだった。北海道・室蘭大谷高では1992年バルセロナ五輪代表候補に選ばれ、93年のJリーグ元年には市原(現J2千葉)でプロデビュー。岡田さんは、同チーム前身の古河電工OBで尊敬する存在だ。ところが、

デビュー年の11月、順風満帆のサッカー人生は交通事故で脊髄を損傷して車いす生活を余儀なくされ、暗転した。
「サッカーができないと知って、死んだ方がましだと思った。でも死ぬのが怖くなった。何をどうやって生きていくのかと……」

車いすバスケットを知ったのは、事故翌年の94年。車いすごとぶつかる激しさ、スピード感に魅せられ、競技を始めた。サッカーでは攻撃一辺倒の選手だったが、車いすバスケットでは守備でも体を張り、代表の中心として長く活躍。現在は大学サッカー部のコーチを務めながら、講演などで全国を飛び回る多忙の日々を送る。

「車いすだからと言って、できないことなんてない。あったとしてもできるように考えろと。代表活動に専念し、リオで目標の6位以上を達成したい」
兄貴分としてチームを引き締め、選手たちを鼓舞していく。(清水暢和)

こんな人

頼りになる存在



及川晋平監督「彼に何かを指示する前に、僕が気付かない部分を『俺がこれをやっておくよ』とサポートしてくれる。ずっと親友としてやってきた仲でもあり、頼りになる存在。心の部分を大切にしているコーチで、本当にいいパートナーを得たと思っている」